

「(心なる者は、君主の官なり、神明これより出す。……) 故に主明かなければ則ち下、安んじ、此れを以て生を養えば則ち寿、世を歿(お)うるまで殆(あやうから)ず。以て天下を為(おさ)むれば則ち大いに昌(さか)んなり。主、明かならざれば則ち十二官危うし。使道(=気血の道)閉塞して通ぜず。形乃ち大いに傷る。此れを以て生を養えば則ち殃(わざわい)あり。以て天下を為める者は、其の宗(=国家、民族)大いに危うし」(同)

靈蘭秘典論篇の「心なる者は、君主の官なり」は『管子』心術上篇の「心(しん)の体に在るは、君の位なり」および、『春秋繁露』通国身篇の「身は心(しん)を以て本と為し、国は君を以て王と為す」を引き継いでいる。

| 人体の藏府 | 国家の官職 | 出るもの |
|-------|-------|------|
| 心 | 君主 | 神明 |
| 肺 | 相傅 | 治節 |
| 肝 | 將軍 | 謀慮 |
| 胆 | 中正 | 決断 |
| 膻中 | 臣使 | 喜楽 |
| 脾・胃 | 倉廩 | 五味 |
| 大腸 | 伝導 | 変化 |
| 小腸 | 受盛 | 化物 |
| 腎 | 作強 | 技巧 |
| 三焦 | 決瀆 | 水道 |
| 膀胱 | 州都 | 津液 |

また、「主、明かならざれば則ち十二官危うし。使道(=気血の道)閉塞して通ぜず。形乃ち大いに傷る。此れを以て生を養えば則ち殃(わざわい)あり。以て天下を為(おさ)める者は、其の宗(=国家、民族)大いに危うし」は、『管子』『呂氏春秋』『淮南子』の以下の部分に対応している。

「[君主である]心(しん)は其道に処(お)り、[官僚である]九竈は理に循(したが)う。[君主が]嗜欲充益すれば、[官僚である]目は色を見ず、耳は声を聞かず。故に曰く、上、其の道を離るれば、下、其の事を失う」(『管子』心術上篇)

「此れをこれ大惑と謂う。かくの若(ごと)きの人は、天の禍する(=わざわいを降ろす)ところなり。此れを以て身を治むれば、必ず死し必ず

★ヒューマンワールドのDVDなら→→→→→ [こちら](#)

■投稿原稿募集

週刊『あはきワールド』では、研究レポート、論説、症例報告、エッセーなどの投稿原稿を募集しています。

★詳細は»» [こちら](#)

★メディカル求人天国

鍼灸マッサージ師・柔道整復師の求人情報は»» [こちら](#)

■ヒューマンワールドのメールマガジン「あはきワールド」は毎週水曜日に配信しています。

★配信登録は»» [こちら](#)

殃（わざわい）あり。此れを以て国を治むれば、必ず残（そこな）い必ず亡ぶ」（『呂氏春秋』重己篇）

「それ欲に従いて性を失い動けば、いまだかつて正しからざるなり。以て身を治すれば則ち危うく、以て国を治すれば則ち乱れ、以て軍に入れば則ち破れる」（『淮南子』齊俗篇）

『素問』靈蘭秘典論篇の身体国家論は、『管子』『呂氏春秋』や『淮南子』『春秋繁露』の「治身治国」論を継承しながら、医家固有の十二藏府論を組み込んで論理構成を精緻化したものである。戦国・漢代の「治身治国」論は、天人合一思想の応用問題で、国家、医療の領域にそれが適用されたものである。政治と医療が緊密に結合した古代のバイオポリティックス（=生政治）の表現といえよう。その政治面からする究極の到達点が

『春秋繁露』であったとすれば、医学面から完成させたのが、靈蘭秘典論篇であった。

◇ 「治身治国」思想の風化

しかし、他方、『黄帝内経』にはこの戦国・漢代の遺産、「治身治国」思想の変容と風化を物語るかのような経文が含まれているのを見逃すことはできない。従来、こうした視点から検討されたことのない篇、それが『靈枢』師伝篇、外揣（がいすい）篇である。まず、師伝篇から見てみよう。

「黄帝曰く、余は先師に聞く、心に藏する所あるも、方に著さず（=心に記憶しても、木簡には著録せず）、と。余、願わくは聞きてこれを藏し、則（のっと）りて之れを行い、上は以て民を治め、下は以て治身し、百姓をして病無く、上下和親し、徳沢下に流れ、子孫に憂い無く、後世に伝えて、終る時、有ること無からしめん。聞くことを得べきか。岐伯曰く、遠きかな問いたまうことや。夫れ民を治むると自ら治むると、彼れを治むると此れを治むると、小を治むると大を治ると、治国と治家と、未だ逆いて之を治ることあらざるなり。夫れ惟だ順うのみ。順うとは、独り陰陽脈論、気の逆順のみにあらざるなり。百姓人民皆、其の志に順うことを欲するなり」（『靈枢』師伝篇）

ここでは、「民を治むると自ら治むると、彼れを治むると此れを治むると、小を治むると大を治ると、治国と治家と」というように、一見、異なった領域のように思える「治める=治療する」行為が、実は同じことであり、すべて「天道」に順うべきのみでなく、人民の志、欲求に順うようにすべきであると語られる。一君万民の古代帝国における平等政治の理想が言及されているかのようでもある。

しかし、「治身治国」論を宣揚する靈蘭秘典論を含む『黄帝内経』であれば、本来はここで、王の心身の健康の維持こそ、天下国家の安泰の中心軸であるとし、まず王の「治身」と「治国」という二つの領域を繋ぐ議論から始めてよかったです。そのうえで他の諸々の領域を「治める」行為もすべて同じだと展開する方が、筋の通った古代医療論になった

だろう。肝腎かなめの中心軸を忘れていやしませんか、である。ここには、『呂氏春秋』に見られた「治身と治国は一理の術なり」と言い切る力強い文体はもはやない。「治身」と言えば、「治国」と響く端的な気風が変容した時代状況におけるふわふわと情報過剰な言葉ではないだろうか。同様なことは、外揣篇にも感じられる。

「黃帝曰く、余、九鍼九篇を聞き、余、親（みず）から其の調を受け、頗（すこぶる）、其の意を得たり。夫れ九鍼なるものは、一に始まりて九に終わる。然れども未だ其の要道を得ざる也。夫れ九鍼なるものは、之れを小にすれば則ち内なく、之を大にすれば則ち外無く、深きこと下と為すべからず。高きこと蓋と為すべからず、恍惚として竅り無く、流溢して極り無し。余は其の天道、人事、四時の変に合するを知る也。然れども余願わくば之を毫毛に雜え、渾束して一と為さん、可なるか。岐伯曰く、明かなるかな、問や。独り鍼道のみに非ず、夫れ治国も亦然り。

黄帝曰く、余、鍼道を聞かんことを願えり、国事に非ざるなり。岐伯曰く、夫れ治国なるものは、夫れ惟だ道（=天道、天地の法則性）のみ。道に非ずんば、何ぞ小大深浅をして雜え合わせて一と為すべけんや」（『靈枢』外揣篇）

九鍼の使い方の極意を知りたいと願う黄帝に、岐伯は、それは「治国」と同じだと謎めいた答えをしている。黄帝は、「余が聞きたいのは鍼道であり国事ではない」と応じ、それを受け岐伯は、「治国」も「鍼道」も「天道」の法則に則る意味で同じだと、『黄帝内経』全体のテーマを承けた優等生的な説明を始める。まどろこしい遠廻りの演出ではないか。

「治身治国」思想は、当然の前提として、「治国」も「鍼道」も同じという論理を含む。鍼は、王の身体の治療を通して国家を治療しているのである。その説明を岐伯から引き出すために、わざわざ黄帝に無知を装うスマート質問をさせている。つまり、時代は、『呂氏春秋』のように「治身と治国は一理の術なり」と有無を言わさぬ理念を打ち出すなら、世間から浮いてしまうと、作者の医家が考えるような状況にあったようである。

◇宇宙論的な開放系の臨床観へ

『靈枢』玉版篇における黄帝の岐伯に向けたオトボケ質問も、同工異曲である。

「余、小鍼を以て細物と為すなり。夫子（=先生）乃ち上はこれを天に合し、下はこれを地に合し、中はこれを人に合すと言う。余、以為（おもえ）らく、鍼の意を過ぐと。願わくば其の故を聞かん」

『黄帝内経』には、「天の法則、地の法則に順い鍼治療をしなければ災いが起こる」と明言されている。鍼は、宇宙を形づくる天地人一体の法則に則り施術されなければならないことは、金科玉条なのである。ところが、黄帝はその大事な思想を岐伯に解説させるために、「先生はそう言うけど、それって大げさじゃないの」とわざわざ言って水を向けるのであ

る。時代はもはや、そうした漫才のような脚色を通してしか、『黄帝内經』の本来の思想を伝え難くなっていたようである。



『靈枢』は『素問』より古いという見方もある。しかし、戦国・漢代の率直で力強い語気の衰退を感じさせる『靈枢』師伝篇、外揣篇、玉版篇のわざとらしい問答が、これらが書かれたのは漢代よりもかなり後ではないかと思わせるに充分である。

『黄帝内經』には、戦国以降の黄老思想がその一要素としていた「治身治国」という身体国家観が流れ込んでいる。その意味でも、『黄帝内經』は『黄帝四經』から『春秋繁露』に至る黄老文献の延長に位置づくだろう。同時に、後漢を中心に前後数百年の幅の中で編纂されてきた『黄帝内經』には、この有機的な身体国家観が崩壊していく痕跡も刻まれているようと思われる。

「治身治国」思想は、万物は天地宇宙から個人の身体まで網の目のように繋がっているという天人合一宇宙観が、身体～王権～国家～医療観に適用されたものである。戦国から漢代に至り完成されたこの思想は、王の身

体の気は、天地、日月と繋がり、人民や動物、植物と繋がり、宇宙に遍満する音楽とも繋がり、王の身体が癒されると国も人民も動物、植物も癒さるとしたシャーマン的な古代の前意識を宿していた。そこでは、王の生殖の行為も、天地の気との一体性を甦らせ、作物や家畜を含めた宇宙の全生命の繁栄のための予祝であった。（その宇宙的な性の儀礼は、後の房中術において、特権階層の男性たちの私的欲望のレベルへと零落した。）

『黄帝内経』に保存された「治身治国」思想を、その古代的な前意識にさかのぼって細やかに読み解けば、わたしたちは、宇宙のあらゆる存在が繋がり、その生命の連鎖の働きによって、いのちは治るようにできているという伝統医療の思想にたどり着くことができる。病んだ者も身の周りの無数のいのちとの関係を取り戻すなら、自ずから癒されるという宇宙論的な開放系の臨床観が、かつて中国だけでなく世界中の伝統社会にあり、それは、わたしたちの未来の臨床観になり得るものなのである。

けれど、『黄帝内経』が示している「治身治国」思想の風化の痕から、もう一つのネガティブな方向に気づくこともできる。「治身治国」思想が変容し風化する過程とは、それが前意識によって繋いでいた身体～王権～国家～医療の絆がバラバラに解き放たれ、それぞれが産業化され、自立していく過程であった。

産業社会の果てにあって、鍼灸師は、医療サービス業の修理工として虚しく分業制度の担い手となり、技術至上主義に陥っていく。鍼灸師は、単に治療室での治し屋にとどまることなく、あらゆるいのちの存在を繋ぐ宇宙論的で有機的な癒しのネットワークを地域社会に構築する主体であり得るという伝統医療本来の臨床観が見失われるのである。

『黄帝内経』を読み解くことは、わたしたちの臨床観がいま直面しているこの岐路に気づくことでもある。

ツイート 2

★この記事に対するご意見やご感想をお寄せください»» [Click Here!](#)

[HOME](#)



[書籍](#) | [DVD](#) | [CD-R](#) | [セミナー](#) | [求人天国](#)

[株式会社 ヒューマンワールド](#)

東京都西東京市田無町7-18-4 TEL.042-444-3678 FAX.042-462-1231

Copyright(c) Human World Co.,Ltd. All rights reserved.